

# コイを育てる～山形におけるコイ養殖方法について～

## 養殖地と方法

- (1) 溜池養魚 山形や福島地方に多い（湧き水が出る溜池）
- (2) 流水養魚 福岡県や長野地方（近くに良い水質の一級河川がある）
- (3) 網飼養魚 霞ヶ浦、九州の池田湖（大型湖がある）



みやさかや桜が池

## I. 溜池養殖の孵化～出荷チャート

### ① 1年目（50～120g）

採卵→孵化（ここまでは種苗生産者に業務委託）→稚魚池で放養→越冬

コイは水温が15℃位になると産卵を始める。5月中旬から採卵し孵化させ稚魚池に放養する。

この間仔コイの成長によって、以下の呼び名となる。

「水仔<sup>1</sup>」 → 「毛仔<sup>2</sup>」 → 「はだか<sup>3</sup>」 → 「当才<sup>4</sup>」

稚魚池に放養した稚魚は秋までは50～120gまで成長すると「当才」と呼ぶ。

## ② 2年目 (300g～1.2kg)

溜池に放養→畜養→出荷

「新仔<sup>5</sup>」は春、水温が10℃～15℃となる桜の開花時期頃に溜池に放養し、餌を与える。

この新仔が、秋になっても300gに満たない小さいサイズ「泣き<sup>6</sup>」と呼ぶ。

「中羽<sup>7</sup>」という名称は、秋に400g以上に成長したコイを指す。

この中でも1.2kgサイズに育ったコイを「切りコイ」と呼び、コイコクや洗い用に出荷する。

## ③ 3年目 (300g～2.0kg)

越冬→畜養→出荷

「泣き」や「中羽」のコイが越冬後、翌年の10月下旬ころまで1.2kg～2kgに成長する。このサイズのコイを「切りゴイ」または「食用大物ゴイ」と呼び市場に出荷する。

---

<sup>1</sup> 孵化直後の仔ゴイがまだ非常に小さく、透明感があるため、文字通り「水のように見える子」という意味から来ている。この時期の仔ゴイは、水中にいると目立たず、まるで水の一部のように見えることから。

<sup>2</sup> 仔ゴイが成長して体に微細な毛のような構造が見られるようになる段階に由来している。この「毛」は実際の毛ではなく、仔ゴイの体の成長に伴う微細な変化を指す言葉である。

<sup>3</sup> この段階の仔ゴイは、仔ゴイがまだ鱗や色彩を持っていない、つまり「裸」の状態であることから来ている。

<sup>4</sup> 文字通り「その歳に当たる」という意味で、つまりその年に生まれ、一定の大きさに成長したコイを指している。これは、コイの成長が順調であることを示す重要な指標となる。

<sup>5</sup> 当才のコイが越冬を経て春を迎え、再びため池に放養される段階のコイを指す。この名称は、「新しい子」という意味で、前年に生まれたコイが新たな成長サイクルを始めることを表している。ここでの「新しい」とは、新たな成長期に入ることを意味し、コイの生活サイクルにおいて重要な時期を示す。

<sup>6</sup> 期待されるサイズに達していないことから、養殖者の失望や「泣き」を象徴するものと解釈されることがあります。これは、養殖において成長が遅れているコイを指す言葉です。

<sup>7</sup> 中間サイズのコイを表す。この言葉は、コイが期待される成長を示していることを意味し、養殖過程での重要な指標となる。

## Ⅱ. 溜池養殖の年間月別の給餌・出荷チャート

### 4月 水温 15℃以下

餌の特徴：餌は水温が低い内は、油分の少ないものを使う。

回数と量：1日1回、体重の0.2%~0.5%

### 5月 水温 15℃以上

餌の特徴：餌は水温が高くなると、蛋白質の高いものに移行する。

回数と量：1日2回、体重の1%

### 6~8月中旬 水温 20℃~25℃

餌の特徴：水温が20℃位から、油分を添加した餌に変える。

回数と量：1日2~4回、体重の2~3%

水温が20℃を超えると成長も盛んになり、特に25℃前後が適温で、コイが一番成長する良い時期である。

しかし水温が25℃位になると、水中の酸素の量が少なくなるため、酸素量を計りながら、酸素が少ない時は餌の量を減らしたり、餌を止めることも重要である。

### 10月 水温 20℃以下

餌の特徴：水温が低くなると食べる餌の量も減るが、越冬のために体内に脂肪を蓄積する。

回数と量：1日1~2回、体重の1%

## 11月 水温 15℃以下 出荷と越冬下

15℃を切ると餌はほとんど食べなくなるので、完全に餌止めをする。

水温が 10℃を切る 11月初旬になると、溜池より順次取り上げ、1.2kg～2.0kg サイズを地下水で畜養してメて出荷する。

養殖して2年目の「中羽」で、1kgに満たないサイズを湧き水が湧く溜池に移し、翌年も育成する。

特に充分育ち切れなかった新仔のメスゴイの 500g サイズは、3年目の 11月には見事に卵を持った卵持ゴイとなる。



<桜が池水揚げ風景>

### ポイント

- 越冬し水温が上がった時に食欲を増すが、その時に餌をやり過ぎると、内蔵に負担がかかり弱ってしまう。
- 夏の酸素不足時の餌の調整
- 9月末の水温が 25℃を切る頃に、水変わりといって夏の水から秋の水になる時の水温の変化により、内臓に障害が起きる。

## ～コイの呼び名について～

コイの養殖において、ふ化後の仔ゴイから切りゴイに至るまでの各成長段階に応じて用いられる名前は、その段階ごとの仔鯉の発育状態や外見的特徴を基に地域や養殖者によって定められている。

これらの名称は、コイの生理的な成長、健康状態、そして養殖計画の中での重要な役割を反映しており、コイのサイズや成長の進行を効率的に理解し管理するための便利な指標となっている。

特に「切ゴイ」や「食用大物ゴイ」のような呼称は、市場価値や消費者の需要に密接に関連し、養殖業者にとって重要な意味を持っている。これらの名称は、養殖業の中でのコイの成長段階を簡潔に表現し、その時期ごとの特徴を明確に示している。

以上

Copyright(c) 2024 株式会社タスクフーズ みやさかや All rights reserved.